

中 支

修水河の渡河戦

宮崎県 佐藤 狷介

私は昭和十三年徴集で第二乙種の四番でした（三番までは翌年一月十日入隊であったのですが）。四番からはその年（昭和十三年十二月二十六日）に都城の歩兵第二十三連隊に応召しました。第六師団は大分、鹿児島、熊本、宮崎を徴募区とする所謂「清正師団」です。それから入隊した時は都城でしたが、最後に二回目の召集から帰ったのは山形でした。

―随分ややこしい軍歴のようですが、入隊後の軍歴の大筋を教えてください。

昭和十四年（入隊した翌年）二月十四日歩兵百二十三連隊へ転出を命ぜられました。

第六師団所謂百号師団へ転出を命ぜられたわけです。早速屯営を出発し、門司港から上海に上陸し、三月五日原隊（六師団―歩兵二十三連隊）に到着しました。

三月六日連隊本部に編入され、三月六日から三月二十一日まで南昌攻略戦における修水河渡河戦に参加しました。その後八月十六日まで、奉新付近の警備、武寧付近の警備につきました。

*昭和十四年八月十七日第十六師団の経理部（師団長 中井良太郎中将）へ転属になりました。

*九月十三日から九月二十一日まで贛湘会戦、高安付近の殲滅戦に参加

*九月二十二日から十月十八日まで九嶺山系及び修水

河の戦鬪に参加

*十二月二十五日まで贛湘会戦後の警備

*十二月二十六日より南京並びに広東に至る輸送

*昭和十五年一月十六日より三月十三日まで広東付近

の警備並びに戦鬪に参加

*三月十四日内地帰還のため三月二十日、コロ島より

出帆

*同年四月一日宇品上陸、同日熊本六師団経理部帰

還。召集解除。(以上百六師団)

*昭和十六年六月二回目応召、同月歩兵第七十二連隊

に転属、満州国興安北省ハイラル着、同地付近の警

備に就き

*昭和十六年十二月十日出発錦県に駐屯

*昭和十六年十二月より昭和十七年五月十七日まで錦

西歩兵第九十連隊に於て外国鎮戍勤務、この間山形

県からの新兵教育をやりました。

*昭和十七年九月伊爾施に移駐、服役三年以上の者は

内地に帰還することになり昭和十八年四月内地帰還

召集解除になりました。

(注)

一、歩兵第七十二連隊は満州第二八三部隊

二、歩兵第九十連隊は満州第一八一部隊で留守部隊

は山形県にあった。新設部隊で新しく軍旗を奉

授したものだ。

—修水河渡河戦の労苦について話して下さい。

昭和十四年三月二十日、午後四時野砲兵隊の一斉射撃

によって修水河の渡河戦が始まりました。おりからの雨

で修水河は増水して河幅が広がってしまいました。そのた

めに対岸の敵の第一線陣地は水没して第二線、第三線の

陣地が盛んに火をふいていました。

我が連隊主力は無事渡河をしたのですが、連隊本部の

うち我々三十六人が取りのこされました。雨はふる、河

ははんらんする。日はくれるで大混乱になりました。

私たちは河岸をうろうろしておりました。いつのまに

か山へまよいこんでいました。明日後統部隊をとおすた

めに徹夜で工兵隊が橋をかける(昼は敵の目標になるの

で夜間の架橋です)ので、工兵隊の架橋を待って対岸に

渡ることになったので河岸をうろうろしていたわけで

す。

私たち三十六人は百二十三連隊へ転属を命ぜられて赴任する途中の者であつたのです。

工兵隊は太いワイヤーを対岸まで渡し、そのワイヤーに鉄船をつなぎ、鉄船のうえに厚板を乗せて架橋するわけで、そのうえを友軍の戦車等を通すことになるわけですから大変な作業です。

渡河作戦の最初の計画では、我が野砲隊十五センチ榴弾砲二百門の弾幕をつくり、歩兵隊がその弾幕に付接して前進し、ちくじ野砲の射程をのばし歩兵隊が前進して敵陣に突っこむ（射撃を中止すると同時に突っ込む）ことになっていました。そのために歩兵隊から砲兵隊に対する合図として擲弾筒を打ちあげ、その擲弾筒発射の爆裂の色によって歩兵隊の意志を砲兵隊につたえることになっていたので、その擲弾筒手が戦死してしまつたのです。砲兵隊は射程をのばさない、つまり野砲の弾着点が前進しなくなつたわけです。そのお陰で（友軍の弾丸で）友軍が死ぬという、なんともいいようのない大混乱が起きました。逃げているつもりが追つていたり、

追つているつもりが逃げていることになったり、思わぬ方向から流れだまがきたり、その流れだまが曹長の左大腿部にあたつてとまり、やむをえず曹長は負傷で後方にさがりました。

そんな状況ですから、我々三十六人の者が山へ迷いこんだときも、うしろからたまがきました。それも逃げ遅れた敵兵がうってきたものでした。めくら滅法にうつのすからたまつたものではありません。

私達もようようの思いで橋を渡つて（工兵隊がかけた橋）対岸にたどりついたのです。たどりついても肝心の連隊本部がどこにいるのかさっぱりわからず、さがすのに一苦労しました。

——連隊本部勤務が多かつたようですが、どんな仕事をされていたのですか。

だいたい経理関係の仕事です。しかしそれだけでなく医務室関係の仕事もやりました。また当時一等兵でしたが連隊本部へ命令受領にもいきましました。命令受領といえは下士官の仕事ですが、命令受領は私の仕事になっていました。受領するだけでなく、それをまた伝達する仕事

もやりました。作戦要務令にきめられている戦闘詳報の仕事も私がやりました。そんな関係もあって、師団各隊の動きや戦闘状況などがよくわかる部署にいたといえます。

また仕事の関係で輜重隊との交流が多かったように思います。時には軍需物資の輸送に従事したこともあり、私の元来の教育を受けたのは軽機関銃です。

―日本軍の装備について教えて下さい。

敵の重火器はソ連製（水冷式）が多く使われていたようです。それから昭和十六年の二回目の召集の時は、葉盒も皮革ではなく紙を圧縮したものでした。帯革も皮革ではなく綿製の厚いベルトでした。靴もブタ皮の靴、背囊はリュックサックのようなものでした。日本もだいぶん物資が不足しているなあと思いました。

機工兵の話

兵庫県 島川 秋男

―島川さんの軍隊当時の話をきかせて下さい。半世紀以前のことですから、お忘れになられたことが多いでしょうが、よろしく願います。

私は昭和五年徴集ですから、もう八十歳です。でも現役で入営しました。

当時の現役兵といえますと、心身共に健全な者でないとなれなかったでしょう。

私は徴兵検査の時異議を申し立てました。当時としては非国民的発言でした。

「私の様なものが甲種合格はおかしいです。本当は体は弱いのです。立派ではありません。」

と言ったがきいていただけず、一月十日に岐阜県各務原の独立飛行第一連隊に入営しました。

―飛行機関係というと、あのころは優秀な人でないと